

第5節

服従から教育へ、 盲導犬訓練の変遷



盲導犬の訓練には、かつての「服従」から抜け出し、
人と犬の「教育」により視覚障害者の歩行をデザインし、
QOL(人生の質)の向上を目標に挑戦を続けてきた当協会の足跡が刻まれています。
タンデム歩行、ロービジョン、盲ろうなど重複障害者への新しい歩行スタイルの提案、
バーハンドルや電子補助具の活用など、
こうした取り組みは、すべて安全で快適な盲導犬歩行のために生まれたものです。



歩行方法と訓練手法の歴史

日本の盲導犬訓練におけるハーネスの持ち手と歩行方法の源流は3つあります。

第1は、ハーネスを左手で持ち道路の左端を歩行する方法です。

この源流は、国際的標準で、日本では塩屋賢一氏に始まります。1967年(昭和42年)、日本盲導犬協会に訓練士養成所が併設され、塩屋賢一氏が訓練士養成所の初代校長となります。4人が入所し、1970年1月に坂井貞雄、織田敏雄、金子紘司の3氏が盲導犬訓練士になりました。塩屋氏は1971年に「東京盲導犬協会(現・アイメイト協会)」を設立し、4人の訓練士を連れて当協会から分離独立します。

その後、塩屋氏とともに行動した福岡義明氏は、1974年に「栃木盲導犬センター(現・東日本盲導犬協会)」を開設。また、栃木で研修を積んだ桜井昭生氏が、

1983年に開設された「福岡盲導犬協会(現・九州盲導犬協会)」に着任しました。一時、当協会を離れていた坂井氏が復帰し、1976年に当協会支所として「北陸盲導犬訓練所」を開設しました。そして、日本盲導犬協会の小金井訓練所から北陸に移ったのが多和田です。

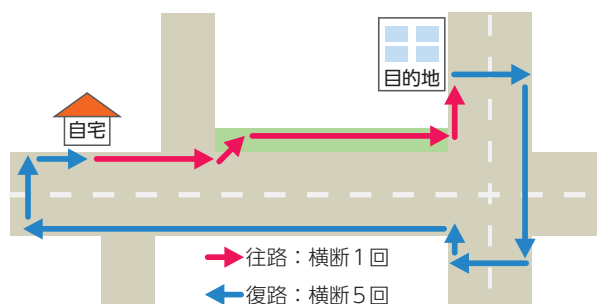
第2は、ハーネスを左右の手に持ち替えて歩行する方法です。

この源流は、イギリスから盲導犬訓練士を招いて盲導犬育成事業を「東京畜犬」が1968(昭和43年)年に開始したことに始まりますが、翌年会社が倒産してしまいます。ここで訓練法の指導を受けていた香月洋一、井内憲次の両氏が「札幌盲導犬協会(現・北海道盲導犬協会)」、河西光氏が「中部盲導犬協会」の設立に参加しました。日本の道路事情に合わせ考え出された歩行です。

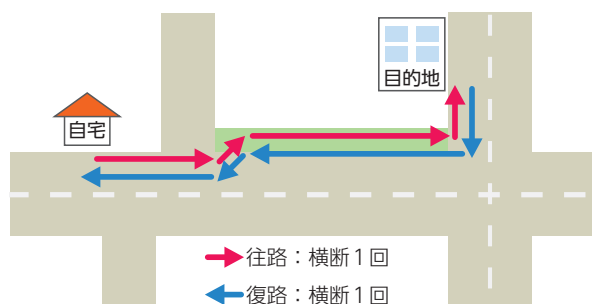
第3は、ハーネスは常に左手に持ちますが、道路の左端もしくは右端を歩く方法です。

この源流は、日本ライトハウスが職員の日柴喜均三

歩行ルートの例—左手持ち歩行の場合



歩行ルートの例—左右持ち替え歩行の場合



(ひしき きんぞう) 氏を1970年(昭和45年)にオーストラリアのロイヤル・ガイドドッグスに派遣し、帰国後訓練所を設置したことに始まります。

このように、ハーネスの持ち手と歩行方法は3つありますが、第4の方法として、左手持ちと左右持ちの中間があります。原則、ハーネスを左手で持ち道路の左端を歩行しますが、特定の場所では右手持ちで右端を歩くという「原則左手持ちの右手併用」です。この方法を積極的に進めているのが日本盲導犬協会です。当協会では、2012年からすべての訓練犬に右手歩行もできるように訓練しています。複雑で交通量の多い日本の道路事情を考慮し、視覚障害者がより安全に歩くために、訓練士が認めた特定の歩行路だけは右手持ち右端歩きを行うのです。前頁の図のように左手持ちですと、道の横断回数が多くなり、危険度が増すようなケースで応用します。

こうした「一部左右持ち」を指導した経験のある施設は、東日本盲導犬協会、関西盲導犬協会、日本ライトハウス、九州盲導犬協会、日本補助犬協会です。

ハーネスの持ち手と歩く方法は4つありますが、犬の訓練はジャーマン・シェパードの訓練に源流があり、「服従訓練」をベースにしています。

1960年代にイギリスで、家畜の劣悪な飼育管理を

改善させ、家畜の福祉を確保することを目的に「5つの自由」という基本原則が定められました。これがペット動物、実験動物、使役動物など、あらゆる動物に対する福祉の基本となり、犬の訓練にも影響を与えています。

The Five Freedoms
5つの自由

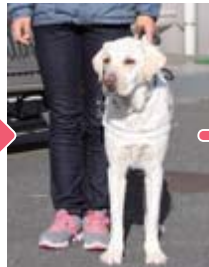
1. Freedom from hunger or thirst
飢えや乾きからの自由
2. Freedom from discomfort
不快感からの自由
3. Freedom from pain, injury or disease
痛みや怪我、病気からの自由
4. Freedom to express normal behavior
自然な行動を表現する自由
5. Freedom from fear and distress
恐れや不安からの自由

また、オペラント学習などの学習理論が発表され、アメリカの家庭犬訓練専門家であるテリーライアン氏が、1967年(昭和43年)から世界各国で犬のしつけ教室を実施し人気を博すようになります。同氏は家庭犬が専門で、盲導犬訓練についての理論ではありませんでしたが、犬とのコミュニケーションの重要性や、まず犬の性格を見極めることなどをしつけの基本に掲げた「テリーライアン式」は、ひたすら厳しい訓練を追求していた盲導犬の世界にも影響を与えました。

訓練の流れ



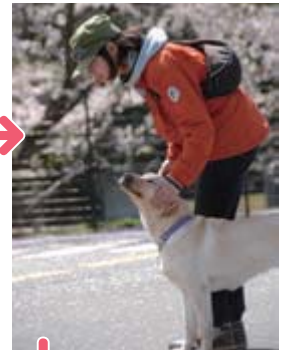
遊びを通して人とコミュニケーションを取ることを学ぶ



ヒールポジションにまっすぐにつきます



犬にとっては遊び。楽しいことを通して、訓練を進めていきます



できた時は「good!」。タイミングが大切



ユーザーとの共同訓練。盲導犬として一人前になる日も間近



目の前の障害物、今までの訓練から犬はどうすればいいか考えます



段差を見つけたら止まって教えます

日本でも、盲導犬訓練に“ほめて育てる”手法が少しずつ浸透していきます。大きく影響を受けたのは、アイメイト協会を除く全国盲導犬施設連合会に加盟する日本盲導犬協会など8施設です。

当協会は、多和田を新設した盲導犬訓練士学校の教務長に迎え、「ほめて育てる訓練」から、さらに「犬が自ら選択し自発する教育」へと進みます。「服従訓練」は死語となり、フードを報酬にはしません。

服従訓練もしない、フードも使わない、当然アイコンタクトも使わないのは、世界で唯一当協会だけではないでしょう。



2 多和田の盲導犬との出会いと教育理論

多和田が「盲導犬教育」にたどり着いた背景を、その生い立ちから見てみましょう。

多和田は、1952年(昭和27年)に滋賀県近江八幡市で生まれました。近江八幡市は、建築家であり、キリスト教の伝道者であり、外皮用薬メンタームで知られる近江兄弟社の設立者ウィリアム・メレル・ヴォーリズの影響を強く受けた街です。幼稚園から小学校まで近江兄弟社学園(現・ヴォーリズ学園)に通い、朝晩礼拝を行い、幼いときから英語に親しみました。

小学校6年のとき、本の虫だった多和田は点字に出会います。「点字本はポチポチが影になってすごくきれいでした。これで本が読める人はすごい」と当時の衝撃を話します。

立命館高校1年のとき、図書館の点字室に訳・二宮邦彦「文藝春秋 刑場に消ゆ 矢貫隆 著」と書かれた800タイトルの点字本に出会いました。二宮邦彦は、

監獄で1,500冊あまりの点字本を残した死刑囚です。点字に興味を持った多和田は、二宮と文通を始め、やがて、点訳のボランティアも始めます。点字の師である二宮が、殺人罪による死刑囚だということは後に知ることになります。この点訳をきっかけに、京都で盲目の塩見三雄牧師と知り合います。この塩見牧師が、1969年(昭和44年)アメリカで訓練を受け、盲導犬を連れて帰国したのです。多和田は、このとき初めて盲導犬と出会いました。

多和田は、1971年に青山学院大学文学部神学科へ進学しますが、当時の大学紛争で授業が受けられない日々が続きます。そんなある日、高校時代に盲学校で知り合った松本正巳が訪ねてきます。全盲の松本は、白杖一本を頼りに彦根から新幹線と中央線を乗り継ぎ、多和田の前に現れ、「遊びに来た」とさりりと言います。「人は目が見えなくてもどこへでも行ける」。多和田は衝撃を受けました。

1974年(昭和49年)、激化する一方の大学紛争に嫌気がさし、大学を辞める決心をした多和田は、日本盲導犬協会の小金井訓練所で盲導犬訓練士としての第一歩を踏み出します。その後、富山の北陸盲導犬訓練所に移り、坂井貞雄氏のもとで盲導犬の訓練に明け暮れます。当時、訓練技術にはひそかに自信を持っていた多和田でしたが、ユーザーからは「あなたの作った犬は使えない」という厳しい言葉が返ってきました。

このとき、犬に服従を求める従来の訓練方法では、訓練士の言うことは聞いても、目の見えない人には服従せず盲導犬として役に立たないのではないか。また、犬に犠牲を強いる訓練でよいのだろうかと考えました。リーダー論への疑問です。多和田にとって、人の役に立てないことは、自分が存在しないのも同然でした。



塩見牧師と盲導犬
「クイールを育てた訓練士」
(文藝春秋)より

懸命に働いても、人の役に立てず、その上、薄給で家族に苦勞をかけていたため精神的に追い込まれます。そして、訓練士を辞める決意を固めます。

しかし、多和田は盲導犬訓練士を辞めませんでした。多和田をとどませたのは、1枚の古い新聞記事でした。「京都に盲導犬を」というタイトルの記事には、塩見牧師が写っていました。指が勝手に電話機のダイヤルを回していました。電話に出た塩見牧師は、「京都に来ないか」と多和田を誘います。そして、関西盲導犬協会でも再出発することになります。

1982年、関西盲導犬協会の仕事を始める前に、多和田はイギリスへ向かいます。そこで英国盲導犬協会でも伝説の人物といわれるデレク・フリーマンと出会います。生まれた子の8割が盲導犬になる最高の繁殖犬ツイードを多和田が評価した眼力を、デレクが気に入ったからです。デレクの持論は「よい盲導犬はよい繁殖によってのみ生まれる」です。デレクは帰国した多和田に1頭の子犬、ツイードの娘マギーを送ります。初めてマギーを見た関西盲導犬協会の関係者は、誰もが「これは犬じゃない。人の話がわかっている」と驚いたそうです。日本では「よい盲導犬は、よい訓練、厳しい訓練から生まれる」と信じられてきましたが、その定説はこのとき覆されました。

「よい盲導犬とは、人と暮らすことが苦にならず、むしろ楽しめる犬のことです。犬の世界には段差がある

から止まるなどというルールはありません。でも、人から止まるのだと教えられたら『うん、それなら止まるうか』と思える犬が、盲導犬になれるのです」と多和田は言います。

これ以降、盲導犬訓練の在り方が、多和田の中で根本から変わります。

1995年(平成7年)、オーストラリアにあるクイーンズランド盲導犬協会から「新しい盲導犬訓練センターの責任者になってほしい」との依頼を受け、多和田は家族とともにオーストラリアへ移住します。多和田流の盲導犬育成法を目の当たりにした現地の職員は驚嘆し「これはオビディエンス(服従訓練)ではない、ドッグ・エデュケーション(DE)だ」と言ったそうです。しかし、オーストラリアでは、日本の職人の世界のような「見て習え」という教育方法は通じません。すべて言葉にして説明しなければなりません。この経験が、多和田の訓練理論を鍛えました。

2002年(平成14年)に帰国した多和田は、関西盲導犬協会に戻りました。そして2004年、当協会が盲導犬訓練士学校を開校するにあたり、教務長として招へいたのです。盲導犬訓練士学校での11年間に及ぶ学生との切磋琢磨は、多和田の訓練理論をさらに教育理論へと高めました。

現在、日本盲導犬協会常任理事、盲導犬育成統括責任者、国際盲導犬連盟アセッサー(査察員、1994年か



富山時代の多和田の活躍を紹介する地元新聞



多和田悟理事(盲導犬育成統括責任者)

ら)として忙しい日々を送る多和田は、「犬訓練の魔術師」「犬語が話せる人」といわれています。

3 日本盲導犬協会 「盲導犬訓練の今」

多和田悟が盲導犬育成統括責任者として当協会で行っている盲導犬の訓練とはどのようなものなのか、そのエッセンスが日本盲導犬協会ホームページに載っています。それが「多和田訓練士が語る 盲導犬の訓練って?」です。専門的な部分も多いですが、ここに第1話から第4話を転載します。読んでいただくことで、多和田の、そして当協会の訓練に関する考え方をわかっていただけるはずです。

第1話 「犬」

盲導犬をやるとは犬にとってどういうことか?

●犬の擬人化により誤って定着した盲導犬像

まず犬自身であるが、日本の盲導犬事業の歴史の中でお利口な犬が目が見えない人のためにその身を賭して仕えるという構図が事業者自身やマスメディアによって広められてきた。犬を擬人化し、あたかも犬が自分の主人である盲導犬使用者の見えないための困難を知って身を賭して支えるという構図が基礎になっていたように思う。

私は犬が行動を起こす要因として“快”には近づき“不

快”からは逃げようとする行動がベースにあると考える。犬と暮らしたことがある人なら理解できると思うが、犬の行動は人が擬人化して考えているだけで犬自身は犬として当たり前行動をとろうとしているだけである。学習は経験により獲得するが、それは人間にとって都合の良いことも悪いことも含まれる。

私の考え方に立つと、犬は自分に嫌なことはしないし人間の様に将来を見通して「今はつらいが将来のために頑張ろう」と考えることは出来ない。その逆に楽しいことは人に不都合であっても、テーブルの足をかじる、気になると吠え続けるなどという行動として自ら進んで行く。このとき犬は決して「父さん、母さんが怒るだろうな」とは考えないで今の自らの利益を追い求める。

●盲導犬訓練の歴史から見えてくること

つらく厳しい訓練に耐えてついに立派な盲導犬が出来るという考え方には根拠がなく、むしろその方法は犬に虐待に近い訓練と称するいじめを加えているのではないだろうか。

私自身42年前に犬のことは何も知らず(点字を打っていて視覚障害者の友人もいたので視覚障害者の歩行の困難については知っていた)この仕事に就いた時、先輩に言われたのは「犬になめられるな」であった。伝統的な犬の訓練は軍用犬、警察犬の流れで、盲導犬も完璧な服従を犬に求めていた。そのために犬にはきつくあたり人間



パピー期。おもちゃで遊ぶのが大好きです



昭和50年代の訓練風景

に対して恐怖の条件を付けることを求められた。盲導犬使用者になる視覚障がい者は正しく訓練された犬を信じて、犬がわき見や教えられた作業をしないなどの悪い行動をした場合は、即チョークと呼ばれる紐を強く引き犬の首に不快のショックを与えることを行い、自分が悪いことをしたことを認識させるというものであった。

現在の私の訓練理論からは言えば、これは視覚障がい者が使うには矛盾だらけの犬の都合も考えない間違ったやり方であった。しかし残念なことに現在でも訓練士の感情の上に訓練をする人がまだいると言われる。そのように訓練された盲導犬に、期待した歩行の理想が得られないとなると、多くの盲導犬ユーザーは現在の犬の引退後に次の犬を持つとはしなかった。私が提供した盲導犬の歩行は、訓練士目線の“犬を訓練し盲導犬を作ること”であって、盲導犬ユーザーが“（見えていた時のように）犬の目を使って歩くために使える盲導犬”ではなかったのである。しかも犬が訓練士の教えたとおりに動かない理由も、“犬が人の言う事を聞かない4つの理由”など思いもしないで、ひたすら犬が人をなめてその行動をとらないのだと考えていた。

犬が人の言う事を聞かない4つの理由

1. 言われた言葉の意味が分からない(忘れた)
2. どうやってそれをしたらよいのか分からない
3. 聞こえなかった
4. 聞ける状態になかった

(文春新書「犬と話を付けるには」から)

ですから当然問題の解決法も犬に服従を求めるもの

で、正しい行動をとらないことを叱って、人の言う事を聞かなければならない事を教え直すというものであった。これでは直るはずもなく、ユーザーの盲導犬への期待を次につなげることもなかったことは当然である。この訓練方法は犬の適性を考えない的外れのものであった。現在では私の訓練理論に賛同する訓練士たちは、犬の適性を考えてその犬が盲導犬として働く10歳になるまでの間、無理強いされることなく、盲導犬を使う視覚障がい者に寄り添いその歩行を手伝う喜びと誇りを持って生きることを目指している。その結果、盲導犬に適性を持つ犬たちは選ばれた繁殖の中からでも5割程度にとどまると考える。

第2話 「犬」

盲導犬育成はどのように進化したのか

●人への服従を求めた犬の「調教」

犬と人が一緒に暮らそうとするとき、人が犬の特性を理解したうえで犬自身も、人間社会で生きることを受け入れていく必要がある。そのため犬自身に、人の社会で生きる上で必要なことを学んでもらわなければならない。そこで人と犬は会話をする必要が出てきた。

人と犬とがコミュニケーションをとるうえで、人が指示したことを犬が行うなど、会話が成立していることを目に見える形で確認する必要があった。人の都合で本来犬には必要ない本能から外れる行動、例えば犬が捕ったものを人に渡す、といったことをさせる際、人は犬に服



昭和50年代の訓練風景

従することを求めた。人は優位に立つことで犬を支配した。その基本に立って行われたのが調教であり、目的は人間の言う事を聞くようにすることにあった。

●犬の「訓練」から「教育」へ

時代は変わり、現在多くの犬たちが日本では家庭犬であり、人と暮らすうえで犬に求められることは「作業」ではなく、「存在」することへと変わってきている。

訓練とは、何かを達成するためにその行動が出来るようになるまで反復練習することである。それに対して「教育」とは、個が持つ特性に応じてその特性を伸ばす活動である、と考える。また調教、訓練は教える側から習う側への一方通行だが、教育は教える側もその対象から学ぶことが出来る相互作用があると考え。私は犬に対しても「教育」を目指す。

そもそも私は、犬は考えることが出来る動物だという前提で犬にかかわってきている。盲導犬を育成し、目の見えない人見えにくい人が歩行するうえで必要な情報を、犬を通じて提供する仕事に関わって40年以上になる。その中で、犬自身が判断し結果として横にいる人間の歩行の安全を確保する作業は、犬自身が行動を自発することと、選択肢の中から正しいと思うことを判断できる能力が養われていなければいけないという結論に至った。

●考える犬を育成するには？

犬が考えるとは、人間のように思考し次にとるべき行

動を決めるのではない。多くない選択肢を与え、犬が考えて選んだ結果行ったことが、犬自身にとって利益になる。さらにその利益が犬にとって満足できるものであれば、その行動を継続的に、盲導犬としてハッピーリタイアを迎える日まで行うことが出来る。

もちろん犬も間違えることもある。しかしその結果に対して人が犬に“違う”ということ伝えられれば、犬は再び考え正しい結果を求めて行動することができる。訓練士は、犬がそのように行動することが出来るように、犬が過去に何を学んだのかを整理し、それを利用して教えていく。そのために、私は犬に対して「No」で教えることはなく、「それは違うよ」という意味で「No」を教える。盲導犬には、間違えないことではなく、間違えたことを修正できる能力こそ求められる。

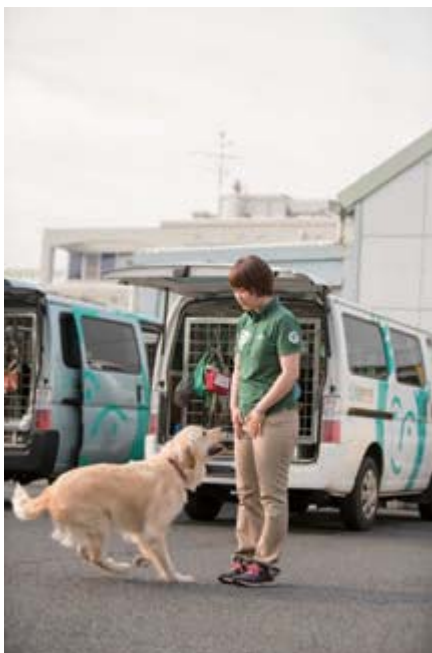
第3話 「訓練士」

訓練士は盲導犬にどのように作業を教えるか？

盲導犬に作業を教える盲導犬訓練士（GDT）と、その犬を使って視覚障がい者が安全、快適で自由な歩行を創造するために歩行指導を行う盲導犬歩行指導員（GDI）とでは求められることが違う。まずは盲導犬訓練士について説明をする。

●盲導犬はなにをするのか What

盲導犬を訓練する時の課題は、犬が“角”“段差”“障害物”の発見をし、その情報をハンドラーである視覚障がい者



訓練犬と遊びながら外で訓練中



訓練士の顔を見上げ、リズムカルに歩くのは楽しい証拠

に提供することである。これらの課題を犬自身が学び、最終的には作業を自発的に行うようにする。

第1話でも言ったとおり私は、犬の学習の前提として“犬は快と不快の2進法で上書き学習をする”と定義するが、作業を出来るようにするため、この快を「正しい、それで良い」という意味で利用する。褒める時「Good」という言葉をかけて、犬が今まで経験してきた喜びの感情と言葉を関連付けるようにする。また不快を「違う」という意味として利用し「No」という言葉と関連付けるが、この場合は犬が人の言う事を聞かない4つの理由から考えて、正しい行動がとれるよう再度指示をする。

そして最後は良くできたね、という意味で次の作業への動機付けも込めて Good で終わる。

盲導犬は警察犬などと比べ、訓練者（訓練士）とハンドラー（視覚障がい者）が違うのが特徴である。盲導犬の訓練は、使う人の違いが犬のパフォーマンスの違いとなりうる親和（Personal）ベースではなく、課目（Task）ベースでなければならないと考えている。

課目ベースとは、犬がやるべきことを理解し、指示した相手が誰であれ、その課目を行うことに達成感と喜びを持てるようにすることである。その人が好きだから作業をするということだと、その人を嫌いになったら、もう作業ができなくなる。しかし課目ベースであれば、その人が好きかどうかではなく、この作業を“しなくてはならないかどうか”によって作業をする・しないが決

まってくる。

●盲導犬はなぜその作業を行うか Why

犬が学んだことを表現するうえで、動機に基づく根拠がなければ成功を続ける（正しい行動をとり続ける）ことは難しくなる。動機と根拠を混同しがちであるが、動機は犬自身の快であり、根拠はそれを行う理由である。

犬の「信用おけるパフォーマンス」と「信用おけないパフォーマンス」の違いは、犬が自発する行動が根拠に基づいているかどうかで決まってくる。根拠のない行動は継続することが難しい。人が笑顔になると必ず優しい言葉をかけてなでてくれる。それをうれしい（快）と思える犬が、求められた作業をこの快と関連付けて遂行する時はじめて、根拠がある作業であるといえる。

●盲導犬はどのようにその作業を出来るようになるのか How

PCはOSという基礎の上にアプリケーションを動かすことで作業を行う。同じように犬と人との関係の中では、犬自身が「人は自分に何かを話し何かを求めてくる、そのことは楽しい」ということを知らなければならない。

犬から見ると人は肯定的な関心の対象でなければならない。そのうえで人が自分（犬）に対して何かを求めてきていることを意識し、結果としてその作業をするようになる。ほとんどの場合、最初は偶然に起こった出来事を褒



訓練犬ゴールデンレトリバー。笑っているように見えることも



上手にできれば「グッド」という言葉で犬を褒めます

めて犬に快とし、その作業に関連する指示語を認識させる。

次にその指示語と関連付けて人の指示でいつでも再現できるようにしていく。その過程においても「作業の紹介」、「強化」、「トライアル&エラー」、「ネガティブサポート」と学習を固定していく。

「段差で止まることを教える」など各過程の詳細は、1章2節52ページを参照。

段差の停止においては昇りであろうが降りであろうが縁石から5cm以内に両手をそろえて停止することを求める。降りには止めるが昇りは止めないで通過させる盲導犬協会が多いなかで、私は昇降共に停止の作業を求める。理由は、進行方向を変えれば、昇は降になり降は昇になるからである。どちらにおいても緊張感と一貫性をもって対応するために、私は昇降共に停止することを求める。

このように犬は“段差探しゲーム”を楽しみ、次の段差を探す動機とする。段差における学習の条件刺激は訓練士によって教えられた「カーブ」という言葉で始まるが、最後は段差の存在を視覚的に確認できないユーザーにその存在を知らせるために、段差そのものが環境刺激となり犬に停止を自発させるということを求める。

角、障害物（地上、頭上、動く人など）も同じように環境刺激によって停止、迂回などの行動をとり、視覚障害者にその存在を教える。中には水たまりや木の枝のような頭上の障害物など、犬が正しく作業をすれば盲導犬ユーザーには何も起こらない（気が付かない）こともある。

人は気が付かず、犬にフィードバック（作業を確認し褒める）がされないため、犬の作業継続の動機、意欲の維持が難しい課題などがある。そのために歩行指導員はユーザーに、犬のいつもと違う行動に対して否定的ではなく肯定的にフィードバックを行うことを求める。

フィードバックには必ず対象となる行動が必要で、それが無い場合には作ってでも犬に行動をとらせる必要がある。例えば犬を褒めようとしたらただ口だけで褒めるのではなく犬の出来ることを指示し、その行動をとろうとした時に、人の言うことに関心をもって聞き学んだことを行動に移そうとするその態度を褒める。同じように口だけのNoではなく、何が違うのか、何が正しいのかを即座に提示できる時以外はNoは使うべきではない。



ユーザーが歩道を渡ろうとするのを後ろから見守る訓練士2名



ユーザーと室内で話をする訓練士。ユーザーの足元には盲導犬がおとなしく待機

第4話 「盲導犬歩行指導員」

共同訓練・フォローアップを通じて

視覚障がい者と向き合う

●歩行指導とは？

視覚障がい者にとって歩行するとはオリエンテーション／ナビゲーション&モビリティ (Orientation/Navigation & Mobility) を指す。

私はオリエンテーション (Orientation) を自分の現在いるところと目的地との関係を、方位を使って理解する方法と考える。ナビゲーション (Navigation) は自分の現在いるところと目的地との関係を、自分中心の前後左右で理解する方法と考える。もちろんどちらか一つだけではなく、組み合わせて目的地までの地図を自分で作って歩く。

「目が見えない見えにくいために歩けない」とは、歩行するための肉体的な機能の不全を意味しているのではない。目的地へ行くための地図を作る (オリエンテーション: Orientation) うえで、現在地の確認、目的地の確認、経路の確認が視覚的に出来ないため

1. 私は今どこにいるのか
2. 目的地はどこか



通勤経路を安全に歩けるよう道の特徴などを伝えながら行うフォローアップ

3. どのように目的地に向かうか

上記3点の確認を、保有視覚を含む他の方法で行わなければならないが、その方法を知らない、また、視覚以外の情報の信憑性^{しんぴようせい}に自信を持ってないために自分は歩けない (自分の力だけで目的地に到達できない) と思っているということである。

歩行指導とは、こうした視覚障害者に必要な情報を得る方法を教えることを意味する。

●歩行に必要な情報を得るために

視覚によって環境の情報が得られない視覚障害者にとって、実際に歩く上で (モビリティ: Mobility) 必要となる環境の情報は

1. どこに障害物があるか
2. そこに段差 (昇り降り共) があるか
3. どこに交差する道路があるのか

上記の3点である。加えて今自分は道路のどの部分にいるのかが分かればなお良い。

歩行とは、一定の環境の中で現在いるところから目的地まで移動することと定義した場合、盲導犬歩行では、犬が目的地を知っているわけではなく盲導犬ユーザーである視覚障がい者自身が必要な環境の情報を得ながら犬に指示して目的地を目指す。そのために犬は

1. 障害物を教える (地上、犬の頭上、人などの動く障害物)
2. 昇り、降り共に段差の端から5cm以内に前肢を置いてその存在を知らせる
3. 角を発見して停止する。

これらの情報を提供するが、日本盲導犬協会では原則として犬を人の左側に置き、人の左手にハーネスのハンドルを持ち道路の左端を歩くことを教えている。また必要に応じて犬を人の右に置き、人の右手にハーネスのハンドルを持ち道路の右側を歩く方がより安全を確保できるときにはそれが出来るように、全頭両側とも歩く指導をしている。歩道上においても進行方向の左端を歩くようにしている。



ユーザー一人ひとりに合わせた訓練の開発

「全盲の人が盲導犬だけを使って歩く」という古典的で画一的な歩行スタイルに、当協会はとらわれていません。タンデム歩行、ロービジョン、重複障害者など、

視覚障害があるゆえに歩くことが困難であったり、危険が伴ったりする人、すべてが当協会のユーザー対象者です。一方、白杖^{はくじょう}の併用、新たな電子機器の利用など、一人でも多くの方が、より安全に歩くことへの挑戦を常に行っています。盲導犬と歩くということは、自立と社会参加のための手段です。手段を目的にしてはいけません。手段は目的達成のために工夫するものだ、当協会は考えます。

タンデム歩行

タンデム歩行とは、1頭の盲導犬を使って2人の視覚障害者が歩く歩行スタイルです。多和田が1994年に、視覚障害リハビリテーション大会で発表しました。2人の視覚障害者が一緒に暮らす場合、住居空間の狭い日本の家屋では大型犬2頭を飼うことがなかなか困難です。こうした状況を何とかできないかという要望から生まれたのがタンデム歩行です。

2人で一緒に歩くため、2人分の幅があることを犬が理解することが必要です。また、別々に1人で歩くこともあるので、それぞれの使い方の違いにも対応する必要があります。2017年3月時点で、日本には21頭がタンデム歩行をしています。当協会には6頭います。

白杖との併用歩行

これまでの盲導犬歩行は、盲導犬だけを使って歩くもので、同時に白杖を使うことは盲導犬歩行の邪魔になるとの考えがありました。盲導犬歩行と白杖歩行、どちらが優位か、そしてどちらを選ぶか、という議論もあったようです。

多和田は1992年の第1回視覚障害リハビリテーショ



絶妙な歩行の2人と1頭です

ン大会で白杖との併用について発表。当協会は、安全を確認するのは人であり、白杖で安全を確認したり、確保できるのであれば積極的に使うべきとの立場をとっています。そのために、併用時の白杖の持ち方、持つ角度、有効な安全確保の方法、持つことで起こる弊害などを教えています。

また、白杖訓練を受けた人は歩行の基礎ができていることが多く、安全確保、歩行時の判断ができる人が多いのです。ですから当協会は、単独歩行の経験がない人には白杖を使つての単独歩行の基礎を、盲導犬訓練の事前訓練として積極的に取り入れています。

バーハンドルの開発

盲導犬と人の接点となるハンドルは、戦後に始まった日本の盲導犬訓練の歴史の中で、60年間にわたってU字型ハンドルが使用されてきました。2014年(平成26年)、当協会は、横浜市総合リハビリテーションセンターの協力を得てユーザーにとってさらに使いやすい形態のハンドルを開発しました。それが棒状の「バーハンドル」です。白杖からの応用が利きやすく、左手持ちが中心ですが左右持ちもしやすく、そして左肩の負担が少ないなどの特徴があります。現在当協会では、バーハンドルへの移行を進めています。また、棒部分が伸び縮みするハンドルなど新しいツール開発にも挑戦しています。

バーハンドルの使い方のプレゼンテーション用資料も作成し、2014年のIGDFセミナー東京大会で発表を行い、海外からもオファーを受けています。

ロービジョンへの対応

「視覚障害=全盲」という思い込みが日本の社会にはあります。「盲導犬を連れた人が席に座ってスマホを見ていました。本当は見えていて、盲導犬は必要ないのではないのですか」という電話が当協会に入ってくる場合があります。こうした背景には、視覚障害リハビリテーションや視覚障害政策が全盲といわれる人を前提に行われてきた歴史があるからです。正確な統計はありませんが、現在視覚障害者の8割以上がロービジョンといわれています。眼科医の世界でも、ようやくロービジョン学会の活動が活発になってきました。視覚障害者の事故に関しても、勘違いが原因のことが多く、全盲といわれる人よりロービジョンの人のほうが、事故率は高いかもしれません。

ロービジョンといわれてる人は、一人ひとり違う見えにくさがあり、そのために一人ひとり違う危険があ

ポジションの比較



ります。したがって、一人ひとり違う見えにくさを評価して、その人に必要な指導をする必要があります。さらに、見えにくさは進行しますので、先のことを想定した訓練が望まれます。

なお、アイマスクをして全盲状態にして訓練すればいいという人もいますが、人は使える視覚情報は使うものです。視覚情報を使わないで歩くことを強要することは、障害者に対する不慣れた圧力になるのではと、当協会は危惧します。

また、視覚情報を利用しながら盲導犬と歩いている人は、当協会では35%ほどで他の協会に比べ若干高いようです。当協会では、今後もロービジョンの受け入れを積極的に行い、「視覚障害=全盲」という社会の誤解をなくしていきたいと考えています。

重複障害

当協会では、スペシャルケースとして常任理事会で承認を得た上で、重複障害者への盲導犬貸与に挑戦しています。スペシャルケースは、盲導犬のパフォーマンスの維持が難しいため、その後のフォローアップなどを頻繁にする必要があります。こうした困難なケースへの挑戦は、当協会の技術力の向上にもつながり、同じ重複障害を持つ人への希望の光を灯すことにもなるはずです。

ケース①ハンセン病による全盲

全盲に加えハンセン病による表層感覚がない人への盲導犬貸与を行いました。表層感覚がなく、ハーネス

を持っている感覚が極めて弱いため、ハーネスの形状に工夫が必要でした。また、歩く際、踏ん張る力が弱く、ふらつくことがあるため、大きな体型で、踏ん張る力が強く、突発行動をまったくしない犬、そして生活しやすい犬を選び、十分な準備をして臨みました。(別冊「ユーザーは語る」106ページ参照)

ケース②盲ろう者

全盲難聴者から全盲強度難聴者、そして全盲ろう者へと、難易度のステージを上げながら全盲ろう者に盲導犬の貸与を行いました。このことは盲ろう者には、大きな福音になったと思います。事前の準備、訓練の工夫、その後のフォローアップの様子など、いろいろな報道機関からの取材を受けました。担当した訓練士は、手話の修得にも励んでいます。(別冊「ユーザーは語る」108ページ参照)

今後、高齢社会において、視覚障害者は高齢になれば大なり小なりの重複障害を持つこととなります。重複障害者が安全に歩くための技術は大変重要になってきます。

支持杖で歩く全盲者のための盲導犬訓練、右腕が使えない全盲者のための盲導犬訓練（転んだとき左手でハーネスを持っているため防御姿勢がとれない）など、いろいろな工夫をしながら訓練に挑戦しています。また、海外では、盲導犬でかつ聴導犬の働きもする犬、盲導犬でかつ介助犬の働きもする犬など、重複障害対応犬の育成が行われています。